

『新体詩歌』による「詩」の流域拡大

—明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(13)—

The Spread of the Reach of “Poetry” in *Shintaishika*

A Study of “National Literature” in Japan as a “Nation State” (13)

大本 達也*

Tatsuya OMOTO

Abstract

In this paper we will examine Shintai-shiika(New-style Songs and Poems, 1882-3). We will categorize and examine the poems in this work in 5 volumes. Those books containing most poems in Shintaishisho (Selection of New-Style Poems, 1882) expanded the themes of Japanese “poetry” and established its standard style.

キーワード：『新体詩抄』，竹内節(隆信)，屈山・小室重弘，小川健次郎(健次郎)，大竹美鳥，日本化

はじめに

詩歌論を扱う各論 4 シリーズに属する本稿は、各論 4-1「日本における「詩」の源流としての「唱歌」の成立—明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(7)—」(『CAMPANA』16号、2010)、各論 4-2「『新体詩抄』による日本の「詩」の本流形成—明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(12)—」(『CAMPANA』21号、2014)に続く各論 4-3にあたる。

1882(明 15)年に、竹内節(本名・隆信、生没年不詳)編集の『新体詩抄』(以下『詩抄』)が刊行されると、同年から翌年にかけてそのほとんどの作品が収められた『新体詩歌』(以下『詩歌』)全5集が刊行され、1885-6(明 19-20)年前後には、この5集を一冊にした合本が30種類以上も出版される[山本:77, 80-81]。各論 4-2でも示したが、明治10年代後半における読者の多くが『詩抄』に比べ《内容豊富で安価》かつ《小型で携帯に便利》なこの詩歌集を手にとったのである[尼崎:127]。すなわち山本康治の言うように当時の「新体詩ブーム」は《『新体詩歌』ブームと言い換えることができる》ものであったのであり[山本:77]、「新体詩(歌)」のイメージは『詩歌』に載った諸作品によって形

*本学非常勤講師、日本文学・思想 (Japanese Literature)

成されたのである。そこで、本稿ではこの詩歌集に収められた作品を検討することで、当時のような「新体詩(歌)」観が形成されていたのかを考察する。

なお、各論 4-2 で示したように、明治初年までの日本では「詩」は漢詩を、「歌」は和歌を意味したのだが、本稿では『詩歌』に採られた作品を示す意味で「詩」「歌」「詩歌」を用い、漢詩を示す場合は「漢詩」、和歌を示す場合は「和歌」と表記する。また、紙面の都合上、引用詩における改行は/、一行空けは//で示す。文中、敬称は省略し、難読字へのふりがなはひらがなルビで、引用文に元々付されているふりがなはカタカナルビで示す。そして、大本による注釈は()、引用は《 》、出典は[編著者名:ページ数]で示す(電子媒体である「人間文化研究機構・近代書誌・近代画像データベース」からの引用は[編著者名:コマ数]とする)。文中の下線はすべて大本による。

1. 『新体詩歌』管見

『詩歌』全5集に収められた詩歌は52篇である。以下、『詩抄』から転載された16篇以外の36作品を、各論 4-2 で用いた『詩抄』作品の主題別分類と同じく、「風物詩」・「戦争詩(戦意発揚型・傷心型)」・「論説詩」・「教訓詩」・「人生詩」の5つに分けて考察する。

(1) 風物詩

風物詩に入る詩歌は7篇である。第1に署名なしの「桜がり」(第2集)だが、越前屋姫君作とされる山田流箏曲から採られたものであり、改行なし、1行あたり25字程度13行で印刷されている(以下、改行なし詩歌の場合、行数のみを記す)。《長閑なる。頃もきさらき。おしなへて。見わたす山も。うちけむり。柳のいと。あさみどり。春のにしき(錦)かあやなくも。都にしらぬ。しらくも(白雲)の。たてるやしるべ。》と、花見の風情を、桜にまつわる和歌や物語に依拠しつつ歌う[竹内 1882b:14-5]。

第2に改行なし9行歌「東の花」(第2集)で、これも署名なし、同じく山田流箏曲より採られ、やはり桜が主題である。《吉野よく見し人は不知。花は東まの。隅田川。》と始まり、花見の様子を愛でつつ、《尚行く末も。千代八千代。長き堤の。花桜ら。栄へ栄へん。御代の春。》と国家安寧を祈る[竹内 1882b:12-3]。

第3に「芙蓉を詠ずる歌」(第2集)で、署名なし、やはり山田流箏曲「芙蓉の峯」より採られたもので、改行なし15行歌。《ましろなる。たか根もはる(春)は。さくら花。さくやひめとは。よ(世)の古し。神代も花のいろさかり》と木花咲耶姫にはじまり、かぐや姫、羽衣天女を花にたとえ、末広がりの富士で国家繁栄をことほぐ[竹内 1882b:15]。天女が三保の松に羽衣を掛け忘れたのが、男を誘惑するためであったのではないか、その原因は《うはき(浮気)のあだか。をとこひでり(男日照り)か。》というような卑俗な歌詞も含む。

第4に「題秋(西詩和訳)」(第3集)である(原詩不詳)。望月秋太郎(不詳)の作品で『東洋学芸雑誌』に「秋」と題して発表された。1、2行目は七五の上句、下句からなり、3行目は上句のみという形式の3行6連詩である。1連目は《早ややさしにけり秋の影庭の木の葉はちらちらと/そよ吹く風に翻かへり 草屋を囲む垣の面の/苔のあからみいよ深き》となっている[竹内 1882c:7-8]、この詩を三浦仁は《夕暮れになるまで山や谷に遊んだ(…)少年時を、秋の山々を眺めつつ懐かしむ回想を主題》とし[三浦:14]、《深まり行く秋色に呼び起こされた回想を感傷的に歌って初期抒情詩としては佳作としてあげられるに足る》と評している[三浦:12]。あくまで現在の「詩」概念からの評価であるが、参考までに挙げておく。

第5に、「遊墨水歌」(第3集)で、平田派の国学者・飯田武郷(1827-1901)作、1連7行の古体長歌である[阿毛:25]。《隅田川。堤の桜。咲きみたれ。》と、隅田川の桜のもとでの舟遊びの風景を歌う[竹内 1882c:16]。

第6に小川健次郎(健次郎、未詳)作「夏夜即事」(第5集)である。『東洋学芸雑誌』初出、各行七五の上句、下句からなる1連17行の創作詩で、《昼の暑さはゆふ立にあらひ流して峯に高く》と始め、《今日のあたりおぼへたる 其嬉しさと楽しさを/つつむとすれど夏衣 吹き返したる峰の松風》と終え、夏の夜の風情を詠む[竹内 1883b:7-8]。

第7に遠藤道信(未詳)作の「詠松島歌」(第5集)で、改行なしの26行長歌に反歌1首をそえる。《陸奥の松島の浦は 島がらの真細き島 浦柄か》と歌い出し、《八千矛の大国島 鯨釣夷が島は 兄弟か》と島々を様々に見立てつつ、松島の風光明媚さを詠む[竹内 1883b:12-3]。

(2-a) 戦争詩・戦意発揚型

戦意発揚型の戦争詩は8篇で、1つめは「楠正成桜井駅に於て遺訓の歌」(第1集)で1連12行歌である。無記名だが、山崎闇斎(1619-82)門下の儒学者・浅見綱斎(1652-1712)の謡曲『楠公父子決別』(未見)から採られたものらしい[尼崎:127]。尊皇思想家としての浅見は幕末の志士に多大な影響を与えた。『太平記』にある楠木正成と息子・正行との別れを描く。桜井駅は現在の大阪府島本郡三島町桜井。湊川における死出のいくさに望み、正成はこの地で息子に再戦を託す。これが父子の最後の別れとなるが、後に正行も同じ尊氏とのいくさで戦死する。《さは去り^{なが}ら正行よ/父の子ならば流石にも。忠義の道は兼て知る/弓張月の影暗く。家名を汚すこと勿れ(…)敵を千里に^お逐ひ退けて。叡慮(御心)を安んじ奉れ/嗚呼叡慮を安んじ奉れ》[竹内 1882a:6-7]とリフレインを用いて終わる。

2つめは「花月の歌」(第1集)で、七五の上句、下句からなる1連34行歌である。作者は第1集の校閲者でジャーナリストの屈山・小室重弘(1858-1908)。《月と花とは昔より。誰が楽まぬ人やある/たがよるこばぬ人やある》と始め、後三年の役での新羅三郎家光の逸話、上杉謙信の漢詩、『平家物語』の「忠度最後」、道真太宰府左遷、『太平記』

の児島高德による後醍醐天皇救出未遂譚と、花月にかこつけ故事をひもとく[阿毛:15]。

《国の乱るるその時は。月の光はかやくとも/花の色香はにほふとも。などたのしみのあるべきぞ(…)国の光を東海の。月よりも尚輝かし/国のほまれをみよしのの。花よりも尚芳しく/するこそ今のつとめなり。誓て斯もなせし後/楽しき月見をして見たや。楽しき花見をして見たや》[竹内 1882a:18-9]。

3つ目は、「刺客を詠ずる詩」(第2集)と題された『東洋学芸雑誌』初出の創作詩である。作者は八門奇者(未詳)で、《大学のはかせたちのものせられたる新体詩抄の体に倣ふ》と添え書きしている[竹内 1882b:8-9]。改行なし 36 行詩(文中に挿入された)を改行とすると 1 連 22 行詩)。この詩歌集発行の 1882 年に起こった板垣退助(1837-1919)暗殺未遂(岐阜事件)に材を取る。襲撃犯で小学校教員・相原尚繁^{なおぶみ}の心情が描かれ、《かかる勢ひ(自由民権運動)つのがりなば。危からまし大君は。(…)汝(板垣)こそ。今将来の国賊と》としつつも、最後では板垣に対しても《其の紳士^{ケツビト}(板垣)は世にためし。すくなきまでにあつかりき。君に忠なるころざし。国につくせるころざし》とし、相原・板垣の双方を愛国の士とすることでしめくくる。[竹内 1882b:8-9]

4つめの「外交の歌」(第2集)は、「花月の歌」と同じ小室による改行なし 5 行創作歌である。以下、全文を挙げる。《西に英吉利北に魯西亜。油断な為せぞ国の人。外表に結ぶ条約も。心の底は測られず。万国公法ありとても。いざ事あらば腕力の。強弱肉を争ふは。覚悟の前のことなるぞ。嗚呼同胞の兄弟よ。御國に生れし甲斐あらば。尽せや勤め諸共に。まこころ込めてつくすべし》[竹内 1882b:9]。条約を結んでいる英国、ロシアとも弱肉強食の関係であり、いざというときには国民は国のために尽さなければならないことを訴える。

5つめの「詠和気公清麻呂歌」(第3集)は、改行なしの 12 行長歌に反歌を添えたものである。作者の久米幹文(1828-94)は、平田派の国学者で、東京大学文学部和漢文学科、古典講習科講師。尊皇の象徴的存在、和気清麻呂を詠んだ歌である。《其臣の。功^{いさお}は高く其臣の。名さへさやけく後世^{のちのよ}の。鏡にせむと称^ほめ給ひ。治めたまひて神とさへ。いはひ奉^{まつ}らす事の尊さ》[竹内 1882c:16]。直接いくさには言及しないが、忠君愛国の武官を讃えているため戦争詩に分類する。

6つ目は「小楠公を詠ずるの歌」(第4集)は作者不詳、各行七五の上句、下句からなる 3 行 10 連の歌である。冒頭《嗚呼正成よ/正成よ》と呼びかけ、《梓弓 引きてかへらぬ赤心を/誓ひし者は百余人 雲霞の如き大軍を/ものともせず斬まくり 君も方をバ枕して/討死せしはいさぎよく いさましかりける事共なり//都も遠き村里の 女わらべにいたるまで/忠君孝子の鑑ぞと 誉る其名は香しく 天地と共に伝はらん/天地とともにつたはらん》としめくくり、正成の忠君を讃える。[竹内 1883a:10-2]

7つ目の署名なしの「詠史」(第4集)もまた楠木正成の忠君を詠む歌である。改行なし 16 行長歌に反歌を添えたもので、桜井の別れの部分は《今を限りに死なはやと。心極め

て桜井の。里にかほれる言の葉を。子に教つつ残し置。》となっている[竹内 1883a:15-6]。

8つ目は作者不詳の「西南の役より凱陣せし人を祝するの歌」(第5集)である。改行なし12行の長歌に反歌をそえる。《折りしも事なく 帰り来てめぐり逢瀬の ありつるはますらたけをの 潔ぎよき^{ヤマト}倭心の しろしめす 弓矢の神の 恵みにて いさをを世々に^ユ遺すなるらん》[竹内 1883b:14]。

(2-b) 戦争詩・傷心型

傷心型の戦争詩は8篇である。第1に「熊谷直実暁に敦盛を追ふの歌」(第1集)で、これは署名なしの1連24行歌だが、山田流箏曲「須磨の嵐」にほぼ同じ。「平家物語」の直実が須磨の合戦において幼き平敦盛を討つ場面を描く。《君はいかなる御方ぞ/名乗りた給へとありければ。下より御声爽かに/我こそ参議経盛の三男。無官の太夫敦盛ぞ/早々首をうたれよと。西に向ひて手を合わせ/流石にたけき熊谷も。我が子の事まで思ひやり/落つる涙はととまらず。鎧の袖に絞りつつ/是非なく大刀を振り揚げて。南無阿弥陀仏の声諸共に/首を前にと落ちにける。無残や花の蒼さへ/須磨の嵐に散りにけり》[竹内 1882a:7-8]。

第2に改行なし32行の長歌「月照僧の入水をいたみて読める歌」(第1集)で、平野次郎国臣(1828-64)作。平野は西郷隆盛(1828-77)と親交のあった尊王攘夷・討幕派の福岡藩士である。実際の事件に題材を採ったもので、寺を弟に譲り、尊王攘夷運動家となった清水寺成就院の僧、月照・玉井忍向(1813-58)は、安政の大獄により幕府に追われる身となり、ついに西郷と入水自殺を図るが、月照のみが死ぬ。《日は神無月の夜の/傾く月と諸共に。照りかがやきてくもりなき/身は大君の為にとて。爰に一人の薩摩鴻》[竹内 1882a:8-9]。参考までに、三輪正胤はこの歌について、《月照の死は、主張を超えたところで、人生の悲痛なることとして捉えられている》と評している[三輪:8]

第3に改行なしの13行長歌、「舞曲に擬して作る」(第1集)である。尊王攘夷派の長州藩医、玄瑞・久坂通武(1840-64)が、親交のあった三条実美(1837-91)らが朝廷を追われ長州に下った七卿落ちに際し吟じたとされる歌。《実美朝臣に李朝卿。壬生沢四条東久世/其外錦小路殿。今うき草の定めなく/旅にしあれハ駒さへも。進み兼てそいをりつつ/降りしく雨の絶間なく。涙に袖は濡はてて/是より海山浅茅原。露霜わけてあしかちる》[竹内 1882a:9]。歌中歌われているのは、順に三条実美、三条西季知(1811-80)、壬生基^{もと}修(1835-1906)、澤宣嘉(1836-73)、四条隆謨(1828-98)、東久世通禧(1834-1912)、錦小路頼徳(1835-64)である。

第4に無署名の「俊基朝臣東下」(第2集)で、これは『太平記』第2巻「俊基朝臣再関東下向事」より取られたものである。放免後再び捕らえられ、鎌倉へ送られる日野俊基の道中の心情を綴った35行にわたる詞章で、和歌2首に1つの漢詩を含む。《落花の雪に踏み迷ふ。片野の春の桜狩り。楓の錦を着て帰る。嵐の山の秋の暮れ。一夜をあかす程

だにも。旅宿となればものうきに。恩愛のちぎり浅からず。我が故里の妻子をバ。行衛も知らず思ひ置き。歳久しくも住みなれし。九重の帝都を限りと顧みて。思はぬ旅に出で給ふ。心のうちぞ憐れなり。》[竹内 1882b:9-11]

第 5 に従三位・毛利元徳(1839-96)作とある「吊忠魂歌」(第 4 集)で、改行なしの 13 行長歌に反歌をそえる。毛利元徳 は長州藩 14 代藩主。「吊」は「弔」の俗字で「忠魂を弔う歌」の意、幕府との戦いで散っていった長州藩士に対する鎮魂歌。《かく明らけき大御代の。みいつくしみにあふことも。この人とももの国のため。のこし置つるいさをしと千歳ののちにかたりつがまし》[竹内 1883a:16-7]

第 6 に「佐久間象山の謫居の歌」(第 5 集)で、佐久間象山(1811-64)が 1857(安政 3)年に書いた書簡で[阿毛:45] 松代蟄居中の心情を吐露したもの。初出は『東洋学芸雑誌』。命を賭した政争の果ての蟄居ゆえ、傷心型戦争詩に含めておいた。改行なしの 7 行長歌反歌を添える。《たらちねのはは(母)のかふこ(蚕)の まゆ(繭)ごもり こもりてながく年ぞ経にける》[竹内 1883b:16-7]

第 7 に『東洋学芸雑誌』初出の創作詩「湘南秋信」(第 5 集)で、これは上句偶数行、下句全行を「も」で終える 1 連 18 行の脚韻詩(下線参照)である。一見、都からの便りを心待ちするやるせなさを綴った詩だが、慶応義塾出で新聞記者となった作者の鈴木券太郎(1863-1939)は当時、自由民権運動に身を投じていたため、山本は本詩と自由民権運動の関連を指摘する[山本:44-50]。《大和心のやる瀬なき/思案なげ首池の^{かも}見//都の人にしらせんも/他にはあらじ是はこも》[竹内 1883b:10-1]といった句には、《官憲に追われて身を隠している》といった、自由民権運動における挫折感が込められているという[阿毛:44]。また、《今年のみより豊けさよ/民の命のかかる紐》[竹内 1883b:10-1]という句に関しては、緊急財政による農村困窮の反映があるらしい[阿毛:44]。政争の果ての心情ととり、傷心型戦争詩に分類する。

(3) 論説詩

論説詩は 2 つで、ひとつは 1 連 46 行歌「自由の歌」(第 1 集)で、「花月の歌」「外交の歌」と同じく小室の作である。この歌には、植木枝盛『民権田舎歌』の影響が指摘されている[阿毛:7](各論 4-2 参照)。《天には自由の鬼となり 地には自由の人ならん/自由よ自由やよ自由 汝と我れがその中は/天地自然の約束ぞ(…)人の自由といふものは天地自然の道なるぞ/つとめよ勵め諸ひとよ 卑屈の民と云はるゝな/余此文をかきおはる 時しも春の夢枕/眠りをさます鐘の音の いともさやかに聞へえける》と、当時の自由民権運動を受けて、西洋の歴史的事例を挙げつつ政治的自由の重要性を主張する[竹内 1882a:10-2]。

もうひとつは、1 連 18 行詩「見^{しよくがをみてかんあり}燭蛾有感」(第 5 集)で、犬山居士(未詳)の作。ロウソクに飛び込む蛾を自由民権運動家にたとえる。《死しても難き其事を//なさまくするは愚なり》、死をもってしてもなしえない運動に身を投じるのは愚の骨頂、《死しもなさぬ

道をとりに進みて後にはまれ得て/後に鑑を残すべき//名誉の人と呼ばはれん/名誉の人と呼ばはれん》、命あつての物種、私は榮達の道を取りたいと詠ずる[竹内 1883b:9-10]。

(4) 教訓詩

3つを教訓詩とする。まず「西詩和訳」(第2集)は、『東洋学芸雑誌』初出の1連4行詩である。作者の坪井正五郎(1863-1913)は、後に東京大学理学部教授として考古学者の草分けとなるが、当時は学生。各句末を「ち」とした脚韻詩(下線参照)である。《いきの出入りとからだの血 しかのみならずよき心地/清きたましひこれ命 時計のめぐりはやくたち/遽に変わる針の位置/歳はすぐともわざとさち//なきは即ち無能無知/多く考へ気をたもち//よきはたらきを為せる後/長しと言はんこのいのち》[竹内 1882b:7]。

次に、創作詩「朝貌の花に寄せて学童を奨励す」(第3集)で、風物詩「夏夜即事」と同じく小川の作。やはり『東洋学芸雑誌』初出。七五の上句下句、9行2連と11行2連からなる。学童を朝顔にたとえて、教訓を垂れる内容。《庭のかきねの朝がほよ 朝な朝なおこたらず/咲くとも尽ぬ其花の 色といひ又形までも/同じ天地の恵みにて 我等の目をば慰さむる(…)学びの児よ此花に/負けず起出て機嫌能 貌洗ひ父母と/我身の無事を神に謝し 庭の面のはき掃除/椽や襖の拭きはらひ 怠らぬやうつとめよや/やがて汝の実も花も 此 薨にまさるべし》[竹内 1882c:6-7]。

最後に、同じく小川の創作詩「世渡りの海」(第5集)である。これも『東洋学芸雑誌』初出で、七五の上句下句の3連、各連9-10行で、連の最終行末を《世渡りや》として区切り、1行空けはなし。第1連で農業、第2連で商業、第3連で回船業における《世渡り》の難しさを詠み、第4連で教訓を垂れる。《傍目をふらず一すらに あすはけふよりあさつては/又あすよりと工夫して 祖先の立てし計画と/其熟練の遺伝とに/光りを加へ漸くに/励み進めバおのづから/我をしらずに一日より/一日と楽に傍目より 羨やむこゑをきく時は/嗚呼いとやすの世渡りや》[竹内 1883b:5-7]。

(5) 人生詩

9篇を人生詩に分類した。1つめは6行10連「代悲白頭翁歌」(第4集)である。作者は大竹美鳥(本名・大岡陽太郎、生没年未詳)で、当時東京大学の学生であったらしい[阿毛:28]。初出の『東洋学芸雑誌』に《洛陽城東詩に擬す》とあり、初唐の詩人・劉希夷(651?-678?)の「代悲白頭翁歌」の翻案歌である[阿毛:28]。リフレインを用いつつ(下線)、往年を思いつつ、老いの身をなげく。《花の顔月の眉 今は頭に霜おきて/哀れ翁になりたり 哀れ汝も赤心せよ(…)花の顔月の眉 うつろみてゆく世の習/緑の髪を今日見れば 越の国なる白山の/頭は白く青柳の 腰は梓の弓なれや》[竹内 1883a:12-4]。

2つめは3行3連の翻訳詩「西詩和訳」(第4集)で、これも大竹の手になる。米詩人・小説家、Bret Harte(1836-1902)のPoems(1871)収録の“Fate”の訳出である。自然への畏怖を歌う。参考に原詩を併記する。《暴風に雨を吹きまぜて いとすさまじき

声すなり/^{ウナツラ}海面そこそと思はるれ 岸うつ波の音高き/今日は^{すなどり}漁業休ならん 嗚呼畏ろしき
声斗り》[竹内 1883a:15]。《The sky is clouded, the rocks are bare,/The spray
of the tempest is white in air;/ The winds are out with the waves at
play,/ And I shall not tempt the sea to-day.》[阿毛:32-3]。

3つめは「^{がくいうのききやうするをおくるうた}送学友帰郷歌」(第5集)で、同じ大竹による5行6連の創作歌である。
《明日は旅路に^{デル}出船のともなり師なる君達の/かしまだち今祝ふなり 祝の酒をすすむなり
/いざやほせほせ其酒を いざやくめくめ此酒を》と、卒業にあたっての感慨を歌いつ
つ、《浮世の事は何事も 思ふままにはならぬとも/さりとて心おくらすな/耐へよ忍べよ
怠るな》と教諭す[竹内 1883b:8-9]。教訓臭もあるが、それが主題ではないため人生
詩とした。

4つ目の「故里の益子がもとより蘭に長歌そへておこされければ」(第2集)は、改行
なしの12行長歌。作者の藤田東湖(1806-55)は水戸藩の儒者で、維新の尊皇の志士に多
大な影響を与えた。妹の益子が蘭の花を添えた歌を送ってきたのに応えた歌で、妹や故郷
に思いをはせながら、閉居の身をなげく[阿毛:20]。《浜の真砂のかず(数)よりも。なほ
さはなれば君(徳川斉昭)が為め。うづもるる。身はなには(浪速)渦。あし(葦)のふし
(節)さへ中々に。よし(葦)ともいはん秋の夜の。旅のあはれもふる里の。春に逢ひぬる
心地とやいはん》[竹内 1882b:11-2]。

5つ目は2行7連の「寒村夜帰」(第4集)で、これは小川の4つ目の創作詩である。
初出は『東洋学芸雑誌』で、田舎暮らしの気楽さを詠む。《かかる淋しき土地なれど/住
めば都の^{きわ}闇がしき(…)四時(四季)おりおりの景物を/我もの顔にもてあそぶ(…)貴人も
知らぬ快楽の 多き此身を神に謝し/謳へば返す谷の山彦》[竹内 1883a:14-5]。

6つ目は、「西行の歌」(第2集)で改行なし7行歌。作者不詳、自らを西行に模して心
情を綴る。《われもむかしはますらをの。真弓つき弓。としをへて。引きたがへたる朝さ
夕は。命ちなりけり。》[竹内 1882b:15-6]

7つ目は「^{こごう}小督の歌」(第2集)で、『平家物語』「小督」を材にした山田流箏曲より採
られた、改行なしの19行歌である。源仲国は、天皇に寵愛された琴の名手・小督の暗殺
を平清盛より命じられる。この詞章では仲国が小督を探して嵯峨野を巡るところから、宮
中に連れ戻すところまでが歌われる。《小督の局。世を忍ぶ。すみかも。明日は。大原に。
かへん姿のなごりとて。よは(夜半)に手習す。つまごと(琴)の。いは(岩)こすおもひ。
せきかねて。涙に袖を。かかしバヤ》[竹内 1882b:12]。

8つ目も山田流箏「長恨歌の歌」より採られた「長恨歌」(第2集)で、白楽天「長恨歌
詩」および謡曲「楊貴妃」に基づく。改行なしの26行歌。冒頭において《今ハ昔し。^{もろこ}唐
しに。色をおもんじ玉ひける帝。おはしませしとき。楊家の娘め。かしこくも。君に召れ
て。朝さくれの。御^{いつくし}籠みあさからず。常にかたはらに^{はんべ}侍りぬ。》と語られる楊貴妃が、
法師の夢の中に現れて《ひよくれんりも。いまハはや。かれかれなりし。うきちぎり。天^{あめ}

のとしのなへなるも。つちの久しく。ふりむるも。つくるときあり。この恨み。綿々めんめん浪々ろうろうとしてたゑまなく。いまにのこせし筆のあと。》と玄宗皇帝への愛憎を語る[竹内1882b:13-4]。「恋愛詩」の側面もあるが、夢現能的な形式により無常観が強く漂うため「人生詩」に分類した。

8つ目は江戸期の国学者・滋野(岩下)貞融さだあき(1801-67)作の「詠石菖歌」(第5集)で、改行なしの12行の詞書と26行の歌からなる。進物の石菖の銘が《正宗》である旨を散文で語った後、正宗、義弘、則重といった名刀工の逸話を歌う。《古の道ふみ(文)まなぶ(学ぶ)かたはら(傍ら)になに(何)手はなさむつるぎ(劍)たちとれバををしく(雄雄しく)そのにほひ(匂い)みればおかしく村肝の心はゆきぬ神代のこのつるぎたちつくとふ人はおほ(多)けれ人のよ(世)は末ながら鎌倉の正宗こそは此道の聖なりけれ》[竹内1883b:15-6]。

2. 『新体詩抄』から『新体詩歌』へ

以上、新たに『詩歌』に加えられた作品をざっと見てきた。ここに『詩抄』から転載された16篇を加えると、明治10年代後半の読者に提示された「新体詩(歌)」の全体像が浮かび上がる。では、日本における“poetry”の本流としての「新体詩(歌)」は、『詩抄』から『詩歌』へという流れの中で、どのようにその水域を広げたのだろうか、以下考察してみよう。

まず、『詩抄』から変わらぬ流れは何か。第1に、各論4-2でも少し触れたが、恋愛詩の不在である。人生詩「長恨歌」や「小督」に恋愛詩の兆しがあるとはいえ、『詩抄』でも『詩歌』でも恋愛を主題とする詩歌は原則として取り入れられない。恋愛が和歌の基本的主題であったことからしても、これが意図的な編集であることは自明だろう。明示されぬ『詩抄』の編集方針を『詩歌』の編者・竹内が汲み取ったわけで、恋愛を詠まないことが「新体詩(歌)」の基本路線となった。

では、その理由は何なのか。それは、なにより漢詩の伝統が生きているためである。尼崎彬は、『詩抄』には《恋の歌がなく志の詩が多い》が《これは編者たちの「詩」のイメージが、じつは西洋の詩よりも漢詩を基準にしていたからだ》と指摘している[尼崎:120]。中西進も言うように、中国では《「詩は志なり」》であり、恋愛詩を歌う《情詩は詩の正道を行くもの》ではなく《邪道の詩》なのだ[中西:25]。すなわち、漢詩においては《政治的な「志」の表現であるものこそが「詩」らしい詩》であり、《政治的・道徳的な内容を含まない詩は低俗で価値がない》のである[尼崎:109]。このような詩観からすれば、「戦争詩」「論説詩」「教訓詩」などこそが漢詩の理念に沿う主題であり、和歌や俗謡の主題である恋愛は卑俗な主題にほかならないことになる。編者たちはこういった漢詩観をもって「新体詩(歌)」を編集したのである。「詩=漢詩」に対抗する形で日

本語による「詩」として企画された「新体詩(歌)」は、西洋詩との接触を機に生まれたにもかかわらず、漢詩の理念をすぐさま離れることはできなかったのである。

第 2 に、詩歌体の不在である。『詩抄』では七五調一辺倒だったのが、『詩歌』ではやや変化を見せるものの、それはあくまでも原作の反映であって、意図されたものではない。連についても、翻訳詩における原詩の反映のみである。そして、いくつかの作品において脚韻やリフレインの採用を試みているが、それもあくまで断片的な試みに過ぎず、リフレインは歌謡の流れに属する。

第 3 に、平易な用語への志向である。竹内は第 1 巻「序」で、《児童モ謡ヒ》《婦女モ和ス》ことを理想に挙げ、そのためには《平常用ユル》語で詩作する必要性を説く[竹内 1882a:2]。《古語ハ古代ノ通言ナリ》、古語は当時の通常語であり、《今語ハ今代ノ通言ナリ》、現代語は現代の通常語である、《古人ハ古^{いにしへ}ノ語ヲ以テ作ル》、いにしへの人は古語で詩歌を作り、《今人ハ今ノ語ヲ以テル》、現代人は現代語で詩歌を作る、《何ノ^{さまたげ}妨カ之アラン》、それに何の問題があるだろうか、竹内はそう力説する[竹内 1882a:2-3]。さらに、《ものものふの弓矢》というのも、小銃・スナイドル銃を用い、《ものものふの「スナイドル」》と言ってもさしつかえないだろうとまで述べる[竹内 1882a:3]。

同様の主張は全 5 巻中で繰り返される。まず、第 3、4 巻校閲者の雨軒・坂部広貫(生没年不詳)は第 3 巻「序」で、ここに収録された作品は《其語不高。其調不卑。苟。通僅々普通之文字者。悉得誦之解其意。也》、用語が難解ではなく調子も卑しくない、そのため普通の文章がわかるものなら読んで意味がわかると評している[竹内 1882c:]。第 4 集の「序」でも柳田(不詳)が、《其語ハ俗其調ハ易、故ニ牧童モ以テ誦スベク、機婦モ以テ読ミ易カルベキナリ》、俗語でやさしく書かれているため、牧童や機織り女のような教養のないものにも理解できると同じ趣旨のことを述べている[竹内 1883a:3]。また、第 5 集の「序」においても、蜻民・首藤次郎(不詳)が《樵漁婦女ノ愚ニ至ルマデ、皆ナ詩歌ノ楽シムベキヲ知ラン》、きこりや漁師、婦女までが楽しめるとしている[竹内 1883b:3]。さらに同集の「跋」において筆者の広瀬要人(未詳)が《語甚不高一誦之解其意也》、その語は難解ではなく一読で意味がわかると賞賛している[竹内 1883b:4]。

以上から、詩歌に用いる用語の平易性、現代性と卑俗性が重要な選定基準であることがわかるだろう。この基準は、『詩抄』から継承したもので、各論 4-2 でひいた井上哲次郎による「序」の冒頭に置かれた《古人之詩。如今之歌曲。雖閭里兒稚。皆習聞之》、いにしへの詩は今の歌曲と同じで田舎の子どもでも理解できるものであったのだという程子の言と呼応するものである。

それにもかかわらず、それぞれの詩歌を見ると、平易語の使用が徹底しているとは決して言えない。多くを古典に拠ったことでこの試みは破綻していると言ってもよいだろう。

けだし、国民全般が理解できる用語の確立は、『詩抄』の編者から受け継いだ「悲願」に過ぎないのだ。

第4に啓蒙性である。本来、平易な用語の採用は「新体詩(歌)」を詠ませることで、国民の精神的向上を図るという啓蒙思想に基づいている。たとえば坂部は、『和歌禪世教。漢詩亦益於徳化也。明矣然』[竹内 1882c:2]、和歌が世の教を援け、漢詩が徳による感化に益することは明らかであるとしている。また第5集の「序」では、首藤が『詩歌ノ楽ムベキヲ知ラバ、漸ク遥カニ学ノ門墻ヲ望ムベシ』[竹内 1883b:3]、詩歌を楽しむようになれば、学問の入り口に立つことができるとしている。そして、第5集の「跋」でも、筆者の広瀬が『一流布民間則感動人心発舒其志気而人々抱進取之氣象至遂深学文之深奥以進我文明之度照々明於見火矣』、この詩歌集が世に広まれば、人々を感動、奮起させ、進んで物事を行う気性を生み、やがて学問の深奥を探り、我国の文明が進むことは火を見るよりも明らかである、『然則比集益於世教果幾許哉』、それゆえこの集はどれほど世に益することとなるだろうかと述べている[竹内 1883b:4]。このように、『新体詩抄』に引き続き『新体詩歌』は啓蒙の書として編まれたものなのである。

では次に、『詩抄』から『詩歌』へとどのような水域が広がったのか、主題別に考察してみよう。まず、風物詩は『詩抄』では3篇に過ぎなかったのが、7篇加えられ計10篇と大幅に増えた。新規採用のうち5篇が山田流箏曲および長歌からとられている。和歌における中心的主題である花鳥風月を歌う歌が増えることで、和歌的伝統とのつながりがより明瞭になっている。

それから戦争詩であるが、戦意発揚型が『詩抄』の3篇に8篇が追加され全部で11篇、傷心型が『詩抄』3篇から1篇のみ採用、新たに8篇が加えられ併せて9篇で計20篇となる。いくさは最も用される主題となったのである。

注目されるのは、日本が題材のものは、『詩抄』では西南戦争に材を採った外山の創作詩「抜刀隊」のみであったのが、『詩歌』において新規採択された詩歌のほとんどが日本史を題材として採っていることであり、それも幕末の尊皇攘夷運動に関わる詩歌が目立つことである。採用却下の2篇は英国軍を扱った翻訳詩「ブルウムフィールド氏兵士帰郷の詩」と「テニソン氏船将の詩」で、その理由は前者については《厭戦的な内容が納められなかった》ため[山本:42]、後者についても、部下の反逆を描いていることが時節に合わないためであろう。山本は《尊皇攘夷に反する内容として除外された可能性》を指摘している[山本:42]。採用と削除に共通する点は、忠君愛国の有無である。

それから、論説詩は『詩抄』の1篇に2篇追加されて計3篇、教訓詩は、『詩抄』4篇に3篇加わり計7篇、そして人生詩は『詩抄』の5篇中4篇採択(矢田部訳採用で外山訳ハムレットは割愛)、そこに8篇加わり計12篇となっている。

論説詩に追加された2編はいずれも自由民権運動にかかわる。これは、戦争詩「刺客を詠ずる詩」や「湘南秋信」にも共通する。『詩歌』出版の前年1881年には国会開設の

勅諭が出され、同年には板垣の岐阜事件が起こる。自由民権運動はまさに時の花であり、読者の心をつかむのに最適の主題であったのだ。

結論に入ろう。三浦は『詩抄』が示した《題材・内容の面からする詩の概念理解》が《多少の誤解を伴いつつもほぼ正確》に『詩歌』に《伝わっている》と結論づけているが〔三浦:12〕、上記の考察から『詩抄』における《詩の概念理解》の概念を『詩歌』が意図的にある方向性に拡張したことがはっきりわかる。すなわち、『詩歌』によって「新体詩(歌)」の概念は「日本化」の方向にその流域を広げられたのである。「日本化」とは日本的題材の多用と忠君愛国主義を柱とした国家主義の強調である。

おわりに

『詩抄』における翻訳詩中心の「新体詩」=「詩(poetry)」は、『詩歌』によってより「日本化」された「詩」群として国民に提示された。結果、この詩歌集は、当時における「日本回帰」の流れの中で、西洋に憧憬を抱きつつも日本的なるものに惹かれる国民の心を的確につかんだのである。

尼崎は《自己犠牲を厭わぬ志と死後の名誉を求める(幕末維新の)壮士の価値観が、国のために命を捧げることを尊いものとする軍人の価値観と通じている》ため、《新体詩の一部》は《やがて軍歌に近づいていく》と指摘する〔尼崎:120〕。『詩抄』において外山が「抜刀隊」で示した軍歌への流れが『詩歌』において勢いを増すのであるが、以後の展開については各論 4-4 で考察する。

参考文献

〈紙媒体〉

尼崎彬(2011)『近代詩の誕生—軍歌と恋歌』大修館書店

阿毛久他校注(2001)『新日本古典文学大系・明治編 12—新体詩・聖書・讚美歌集』岩波書店

中西進(2004)『日本文学と漢詩』岩波書店

山本康治(2012)『明治詩の成立と展開—学校教育との関わりから』ひつじ書房

〈電子媒体 最終閲覧日 2015. 11. 11〉

(a)人間文化研究機構・近代書誌・近代画像データベース

竹内隆信編(1882a)『新体詩歌・第1集』竹内隆信

(<http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00001.html#1>)

竹内隆信編(1882b)『新体詩歌・第2集』竹内隆信

(<http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00002.html#1>)

竹内隆信編(1882c)『新体詩歌・第3集』竹内隆信

(<http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00003.html#1>)

竹内隆信編(1883a)『新体詩歌・第4集』竹内隆信

(<http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00004.html#1>)

竹内隆信編(1883b)『新体詩歌・第5集』竹内隆信

(<http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00005.html#1>)

(b)その他

三浦仁(1989)「『新体詩抄』とその周辺—詩語・詩想の継承(1)」山梨県立女子短期大学紀要第22号

(http://libweb.nlib.yamanashi-ken.ac.jp/infolib/user_contents/02/G0000002repository/jtk1989001.pdf)

三輪正胤(1998)「黒田清輝作「昔語り」の語ること : 文学と絵画の接点から」大阪府立大学学術情報リポジトリ

(<http://repository.osakafu.ac.jp/dspace/bitstream/10466/8875/1/2009200426.pdf>)

